花傳書 三

特別
チ12
3606
3

宮城県立図書館

特
チ12
3606
3

柳窟といひ奇石うゑおかなすわ先那波氏乃
俵屋山乃ことの葉よりへて長奇をたく き
うまふかし 我庭をてらくひと号せわ我乃
よつて德をうくひんと称もつんひとい奇石
をくていわをかまくすくく奇石を心うけ
ん乃ま乃要なわ奇石乃うくひいうか
そそつうふかしとをいひうことわをくて
うくていうくきなうるのをまてなわ先奇石
むよあまい月花をうても雨乃ふるも風の
ふくまもむ此書のすたくなきくてもあう
おもろやとうろを付くへい思ひあとをて
うとひ一一か面白きなわさやうこ心うけ

根山家蔵

58 2105

えんの何時よりか貴人る人乃清所の
ときも儀うゝひつゝまゝ和りよりまゝうゝ德
口よいける拍なわ才一ゝ字章かいうゝ文字
うけわのへちゝめゆるゝ所なほうゝそいう
くほあをさけ一字けめ二字つめ三字あうわ
三字さうわ三ツひきゝ字をうわふうふう
ゝうゝあうわかと拍子きけてきゝをゝな
まわあうゝるゝもゝ次才乃付ゝせまゝ
わほゝさゝゝと一せいかうゝひ
いろ云紫曲舞上さうゝき入をあひろうゝひ
出ちきわかくのゝとくゝろうゝひけうゝ人
つゝは是をうゝふといへともうゝを志わて

うゝゝ人ゝうれくゝろこをいろをうゝひ
わをゝ高ゝゝしゝうゝゝ事才一のゝひ
なわゝ十弁といゝるあわ是あまわいゝさほ
拍なわる上のまへてうゝひわをきうせる
いてゝ笑ゝは出かうゝゝて五音といゝ事
違ゝけねい面白きゝといゝるゝ謡やうれす
あゝくゝまゝはあゝいひゝとうゝの歌めゝ
一ゝせいくのうゝひのす
正月いう歌ゝふをうんゝをわう砂い松を
いゝ弁うゝうゝひすわ初春ゝ子日乃松とて
こゝをいゝ弁なまゝふゝ人乃あゝは松を門ゝ
いゝ弁さゝめゝるすまゝいちゝせのようひを

たまつきうへ書盤木まして枝葉のかゆ　すも
おけまい花花葉のさうひもあ　さんふ
こうもいたりく為風よまくは事もあく雪
霜もいくまはる宮中まはゆきまはわあをを
わうくと若やき見するか横る松い法木の
うちまて用お文名木をわかるゆへよりて
正月よ万人門よ松をいたねうめ枝ひきて
とくとくの祢を勅諸し人召も松のよりひ枝
たもつやうよと年はもうめはこま枝いもふ
志うるまわてる砂い松のめてだき感慨を
作るわるのふあまい初春よこま建うとひ
そめやうふをはお多くはいとくよはうの

松よ松わ　郯波のみこうけまの清信
あうそひあ　時百濟國すわ王にといる相人
こは國よわうわ郯波の法子よ市代をゆ作わ
給ソ　我新いよ　安金あるへきう　奏守
ドふ付て則郯波乃法子清くいよ作給ふ
を時清即位あはてかのあまたの梅をこもわ
して市うさ見もふ乃いまは桜さうりさき
見たまとうやうよむめいいあ名木也ふ乃
もも花のあよとドて梅い法木のまあ乃熱氣
あまいうくい初春よ是をもちひるれ
うへうひい寄るまわいてうるりよ作て
郯波作のうをもちひ郯波乃むめ桜うひ

うめ[illegible]なり

一三月三日桃をいもふ祝言あまい酒を母衣す
朝なわいかまも考れ粥子い双調也

一五月五日うきつくさなり

一七月七日七夕あきうかの曲舞をうたへ
そ子あいむ[illegible]もろこうは遊子伯陽といふ
夫婦の人あり皮夫婦月をれもろくおりひ
ゆふへは月れいけうを待うまあう作きい
いわうこの月をおうてたうき雨はあうわ
かあ[illegible]をあ[illegible]ゆくたうきんをふうく月を
おもろくおもひ一会はうり二人のものは
世をさわては二いの星となわ天はむまはく

二いの七夕こそ也今も七月七日の歌とは
一文ちきわをあ[illegible]たまふとゆわうゆへは
七月七日はうこ我ふん結を作うり多くは
たかうこへ向をあ[illegible]日なわ祝ふ[illegible]ふて
うひも七夕をうこあきうかの曲舞も
遊子伯陽乃ふ也さ[illegible]ふまわてあさうかの
曲舞をうふ也

一九月九日は慈童をうふ也こそもろこう
用乃擽王の時慈童といふ人ありさ[illegible]子面
あわてて[illegible]きんさんは流[illegible]ときは志とう
観音経の二句の偈をあさゆふ[illegible]ふ[illegible]
きはまわ藥れあ答はお弟わこれ水をあくし

七百歳成たるつるれいをうつぬまい
菊ぬのとうわおうまいつる山水不老ふ死の
業となわ用お交佳例なわ九月九日いきくを
いちふせ川くなわかるゆへは菊ぬめてたき
いとくあまいとてもとうをうふなわ
一かとゆてのうくひいうくひうんをもつくも
うちうへひも也うくめくうちうへをもやうて
酒ふといふ低なわ
一舩中むことわよめのへのうくふひそうくひうへ
をへうくひ門出のうくひうくひとはうくぬもて也
うまいかへをといふる成きくふ也むことう
よめとわのうくひいぬ一の祝云なわ言葉の

うくひ成ぬとせわこまあひひひといふ低也
一わくまくの徳の事あくひといついい史る成
いむ也されいを心うけかんうも也うくひの
うち史るのたくひのあふるよくかんうへを
徳をうくふまくきなわ調子も双調を用ふ也
むくいい盤渉ふ性ふまいもちひ結わくく
當代い是も史を考くうへい史るれを色とて
うまを略し双調ふ定む双調い春の調子なわ
春い四季ぬうくめとのくめあまそうま
求一の祝云なわうるゆへは家のうくめは
もちゆまくいくく双調い本性なわうくく
もつてあるお應の調子と是成うふきり

一舩中のまひ乃祝言い自然居士ゟ曲舞長老ゟ
きわきわ
一哥乃命毛ゟ哥ゟはなとよりとひ毛あ〻いあわ
とを〻乃曲舞是丁祝言いれい紀貫之い
世よかくれあき哥乃名人よて清書而をうけ
たまりわいり〻へいまゝてのうゝの志ゟ我
えゝゝ古今集抜作くわうゝわこゝも一代集の
めりらなわさゟよりてうゝのうゝふうゝハ
古ゝ集よこえゝる事いゟ〻かるゆへ丁
哥乃あそひのはいひ曲舞をうゝへとあわ
一五音のまきゝゝひの大る是よきくむる変の
舞ゝ先ゟ哥とゟ祝言迦葉長傷乱曲ゟ

ゟいの乃ゝゟのわうちゟ也よくゟ仏へし世るよ
謡ゟおかくあわといふとも五音よ謡ゟけゟ
人ゟまれ也ゟ哥ゝしくうゝいうひ
面白きとゟの事ゟ哥ゟ万すをてく
ゟ哥のゝんきんゟけゟ要也先ゝうひ
おかえゝんへいたゟ弟ゟまんしかんのみちを
わとゟ〻ゝるあわゝ子弟い人よ拍をとへい
我けいあきとゟ仏と事ゟけきい一紙の
あひゝ拍いゝてゝてなわわう藝をゟ
さけ初心よかへわトゟもものゟとふと
ゝき上ゟれわき也古ゝをよいくゝ下まゝう
上ゟ乃ゝへのかさわあき迦ゝもゝ是ゝ

すがさまいなれ拙いをれ折度をやまひとも
うゝひい高曲のうゝひたき事をやまひと
きわ拙いいまめのたゆる遥とは先大竹の
とくまてまつすくふしをくふうまを熱して
るなとも垂なるるををすきるといひ山坂ある
ゆうゝうるるいあきるといへいうゝひも
るるたとへ垂ゆるゝ中意うゝへ才一文字
大きゆきい遥ちさほしを字ちいさくれい
うゝひ必かろしちやきとかろきとちゆう
なるとこきれかきゆふちうひ也熱引うゝひ
やうものるたとへいゆ永れかうきいうりゝ
ゆきい深ゆもうしうおもんをいろくは

このゝうても下地あるゝうきい深ゆうりゝ
うゝひるさまい古人のうきをうまる出拙は
うゝひとはちうものとゆうきんもかゝの
うゝの低なわまつうゝひはうろかきんと
拙もつゝ高るの心ゆくいうゝひは面白きと
いふ事をちかゝしとんこうわを子西い
うゝひつまはうゝろは拙て風吹るも西の
るるもうゝ拙うけあゝたもゝろやと会し
月花をうてもれひあうせうゝひをむひは
拙へい俄は人の拙西の時もをの作ゝ
時は似合うるうゝひにはいりる拙也古とも
序も和奇いうれ根をきんは作をうれ花拙

詞書よひ〳〵くとあわうやうのことを聞もこれ
うさひのんにふる〳〵一のまわ十万
いくらんと数もあん書よまちたく二のまわ
ちかく百千よいくらんと思ふ心よてけいこ
さうわる数なわ数別うさひの梅は花乃揺よ
うさひたき数ますてしるなわ梅い一陪と示こひ
そて枝けきもさ〳〵うよよさき所あ一花いまこ
うあやふさけうふうけく白ひもそれ
うる数めくうへいかやうふうふへき事
〳〵大形ますていなわわ〳〵うやうのるを
きくよつきてもおこれ警古ますてそめけよる
のふいすきもあ〳〵きも我〳〵さ分ものよて

人乃ふ〳〵あ〳〵とい〳〵の事よてさ〳〵くそ分
ま〳〵そるみう〳〵ひいふ別ゆきうへいう〳〵ひ
ま〳〵てきたいうへいまなわやすう
み五書よみいのうう〳〵ひいさまわうる俄よ
うへともみいの乃あをさめそうへいみ書よ
みけのこ乃乃乃数いあ是こうしやのまへ
ますてこまう乃〳〵ひうけきうせうそい
なわう〳〵くる但未世い五書志わうるものも
ま乃乃数るあひ〳〵みま書違わきうてもい〳〵さ分
るよるを

一才一説云これ曲味いたへいとしれそめの
市ますこひといるうとう〳〵ま〳〵いう海く

しきるもあくこと祝云と一孔するのこなわ
さまい曲よいわかうあることあくこころまは
祝云をあくこうこ月と字性こ変するく
こうこうなわ
古今　業代を松ときをいと牡乃る
ちとせのうはけよまんとおもへそ
夫ひさうこの神うわあめ行ちひこ者國乃
おこわあまの乃みかこれ生くなるや名もふく
こら乃神こうまはまこ屋まれ國を作わ
をへこきあまや大業の月うけ長宗時とうや
あをふすあこれ宗宇れ神亀くすえくこ
うぬ月やこ為のすくなるへこうすう系や

ふこうのさとの宮作こわおうち山乃うけ
たかく雲のうへあ所乃作きもひうわや
みうこ世

右は大小いの作きもれあ
一弟二幽玄は曲味いよせい城中とは幽玄と云
こと成人こうはうたこうとは行ゆるせ
こうまは行きなるひう事なわ花山乃入て
月をここ黄泉よい　いこわて家為を志作こま
似こわ幽玄ようれ代あ所へし一いを一い遊
これ心をすくこ分別をへ心おいまこは信
なくていい月とをあるへへ幽玄といへいとて
引ちへてあうくを変ゆふくとうこふまは

あしひきのうちよゆうをもちうふとのそわ
ぶ志うきんの長冢うなる低なわはよ遥玄ハ
ものけすき城ゆとすあへをくゆうきんの
二字をくゆ別をへ

古奇　まくやうんうる形みみのく揺うり
　　をあ乃言ちう春れあをなり
さあきさふ拙のさひ　き秋の歌乃人月まれ
なる古ち乃庭の松うせ更ゑて月もうくあく
形ち乃草わをれてるいうへを思ふうか
みくいつまてうまつ事あくてあうへん
ゑよ何るも思ひての人はゆる世の中武
くいけとあく一をちよ祈む佛のけゑ乃糸

見ちひきゆへけれあ　ゆすひをもてくさを
なまふ清ちうひくゆくよりと乃てきぬの
ゆくをい西乃山あまとあうめい四まの秋乃
うまつ乃こをのくきこゆをともあくハ
いけくをさめあき世のゆめうろあふの
をとよりさめてまくく
一才三をんかこれ曲味いいおお乃遥玄乃ふく
なわふる也よせいを思ふ曲味切なわたとを
宮末乃ふをすあわあうう第いをくやうふ
おかとうなうりとくいやーき女れひとよ
やけくゆもくをんとて俄よひきけくろひ
うへともきわめてうあこれ玄暮の曲風

おのゝいとけなるすいやのうちもおのゝ
とも風流い何とをくまへ〳〵うやうまとと
をくさぶくとあるうちはこゝろの修行あ〳〵
れてかゝるひとは風流を意とゝなすわうへを
ゝとかかさわるゝうわすていものよそく
〳〵いくきことあわこゝまを当流は男心也
いおゆうきんのよせいまは春の曙のごとく
うれ意暮まは秋のゆふへをのうむりこと〳〵
かやうの事いろ〳〵とをきやうはうへとも
すく〳〵うひきいきゝめてものちかく
やすきるなわ

古今　志のつまとゝよいてゝわわう恋い
　　拙や拙もふとひとのとふまて
夕みあ〳〵あたの雲いまるおもひのけま
なゝぬさひき秋はのをけいろゝの
山はひゝきけゝゆるゝんとてわうまをもよ
かゝせめてねやもる月れるも云い拙ゝ
のこゝすてまさひとり弥はなわゝるゝや
翠帳紅閨はまゝゝあ家のうへかき
ふとまのよすゝゝも同完のあとゆめもあ
ようまもれあ世の食のこをさわともと
いりまて草の露のまもは職を程のうゝひ
うれをさんきうのさゝめとともたまうきゝ

はるゝへていまの世までもてはやしたるもの
我素の秋すわさきよりかぜと夕のうすい
うさぶきとあゝしと紫の人こゝろたのめて
こぬ秋いつもまとゝ梧千万ちりくて
うゝのうゝまとゝなるむきいの夕くれの秋風
あゝ山おろ一望ふもあの松をこういをと
けうき我まつ人うわのをとつまをいつきう
ま　せめて地うゝさうのあふきまよふきて、
うせのたゝとなるもたゝやすきの宮の
秋風ひやゝふゝかちて国雲のあふきも
雲ふきい名をきくもすさまゝくてこうふう
うゝみあわゝやゝ物もへい見もろよあふい
わうきふるへきそむくひふきい今夏世をも
人をもうゝむまゝゝ物もたきぬ分の程を
思ひけくきてひとわるれいんちうう孫やそ
さひゝき
あへそくきんかい一大るなわむゝれ
名人ちもこれうひなと成ようまく
ドされ人詩里は四高いまきゆゝくんな
きんかの俳いまきゝうさまゝそ子西い男ひ
いわるゝくんかあゝ書乃こ点は成て
きゝはきうきゝそれ書乃こ点は成て
五理うすく成なわさまいき高あとゝも点れ
白ふとの面白きい成かゝゝとき高しゝちも

ゆさまをかめ山の時分ちらくに分るへき拍也
山曲い乱曲あり秘事也

一第四義傷

山曲味い春は花もちらぬちりくに成たて
羽山も風の拍をこき木こ乃こすゑあきちゃ
つのきゝき伐見るゝとゝうめく作ら
色をけくたてくたうくのあきこるゝ
れのこゑうゝゝあるこゝろなるへしけきい
玄尊義傷乃二ついい一変乃分なるを人
ゝゝ同あるようふ事こまおゝきす
なわるくに分すへ

古今　俊茅生や神乃ちちゝ秋の雲
わもれぬゆめをとふあゝ武
さうちう露乃ゝ志ぬきくゝゝゝぬるゝ好ち
ちく老ゆまてゝ乃ゝ風ゝてとんともまつい
こゝん寸きゝや何事も思ひたゝるゝん名も
魯もけぬゝはそちゝぬちゝゝ乃ゝをいつ
ゝゝさめんく　一生い風乃おれ雲夢乃
あひゝゝさんゝゝやまく三界い水のうへの淡
老ゆ乃おゝきえんとゝゝゝてんの内ゝは
ゝきる乃うかゝゝをつけひをいのちやうの
うちゝはうろのくゝんきゝとうや栄花い
こゝゝ春は花きのふいさかんゝゝともゝふい

おとろふるうしゆふへよきんぞとり寄さうわ秋来ぬて
花さんく楽遊時うつわり時へんじてたのしき
院よさぬておあしこちやく来きり　夕顔乃
花乃うへなる露よりわもとろあきものそうけ
ろふのあるゝあきかのいちして世を秋風乃
うちなひきむきぬる田露乃高を吟て四季乃
田長乃一こゑもたうよきちをうきとうへん
袁きなわゝる人鳥をいかゝあきとうへき

一才五祇曲

じ曲いたけうる曲なわうこひいまくいたゝ
さふよわきとうけさせてうこふいさうり

きうきとたへいこれをうこい庭の松おとを
聴もろくきてちくみひきのへてまこすく
なるを引ちくめあとさするをものよいはさふ
人見をれもろくとれもふこきこれみちれ
ひたうなわくうこふいたくものと
いはうへいえよ面白うこひ二楽うり自然よ
うちうる松乃年をへて多くこひうこう
減よれもろくへ見もまへくれ四書を
すくれてうこひそいいうてうはうん曲と
ふるへき当時のうこひいきうきんすわきや
祇曲よなわゝる古人乃ゆをうきる　すとも
皆なうくよなわゝるたくし世上めじるとそび

乃をとけるもみぢ葉ぬすまんとくるく引
かんなるわ

古今　いけるとも春さひはてわかこ山乃
むときうもとふこけのむをまて

山いきやうろさんとうゝ桃太郎うゝい
たうゝのあゝもとゞ城家とさゝめて本うけは
すめわけうゝまよのうむかゝゝそ流山のもゝを
食とれい西を毋をもうゝやますゝうわふは
をあきあゝ此本のもとあまいうふりをあ城
をよ人とうめをかくて三とせ此乃花く
ふゝ秋の月くもゝぬ内代とたのゝ見うれ世
むあゝときゝしう い清わうまかあゝさま

いうう山のむをもみをうゝの月をもあうめは
死あんいうちれまうけ乃まの唐乃わ
をたまあくふ事もあくなき山て人月も
ちゝゝおけきゝなわく
右は五言乃ふるくあきちるゝんなわ
又祝云のゝゝひ乃ふゝよ大ふとつけふるい
わうちゆの二字なわわうちゆの字いをうい
よこ也ちゆ乃字いゝて也ちまい度二字んね
肝要也横のあをいふとく竪乃あをいかそく
ゝゝひゝ也めは遠ゝへいあをたを巻いき城
たをけゝ也は横竪のんみくいゝ遠の遠乃も
む也ゝゝちあやをあをとゝふるあわこをも

横竪也をいとれそあの色をすつてうゝひよ
もんなけくゝゆも織地をわすちいあくゝれそを
をる地也あやの文といふ白き上よりをを
あさきけうへよおあ〜あさきまて文をを
うゝちやの文すてまゝ上よ同いろすて
文をたくわたをいはゝ濃もおあ〜あを二ツよ
ゆけてうてよこをうゝひろへゝ文をたゝ
ゆへよゝ色あやをかをとゆわはゝろをすく
分別してつよ心うけ濃つけるいをいうく
ををぬ地ふくるあきゆふいうけ約束なわ

一

うゝひろゆわよ上下と云事あわ是を奇の
上の白下れ白ろうゝろなわい〜めをかあく

ゆわはを作むる事十七字十四字のつもわ
なわ地別うゝひいい奇なよわかるよわて
法すようをを引也ゆわを十七十四を合三十
一ろ数ろころをゆるとみくうわあちよ
を数をゆるまていふけをともこをたとへ也

一

ようをの位と云すあわ右の上下れ心也
文字うつわよおをかくゝいのちを作むる
まへをををれいろを長く引を四す六すと
いへをこをいい字作ものわ心のうをなるろ
ようてうをの位といふたへい六すと六すと
あうせうへいゝよよつををゝ濃もまへをひき
まゝやもろうゝせてのちをもひけい六すと

六すなわちこれ男女の
ことなり然るにわかて六すなわち陰陽
天地あふ也かるゆへにようてなわかうき城
陽とこうきを陰とさとめ陰陽和合せん
なわちとへい春は日なかくれいそのはる
町世界も一年のうちはあつき季と見し
うき季とあたせて陰陽和合と見たりまし
いなくはあつを長短のたいふ也
一はまはちるものうひやうのすなわち大夫より
胴子をめしてうへしつけあひきて
うひいくさをきゝ文字一のまを稽をそく
付るなわ大夫とたあやうふうひいう

ふりうと思ひくへいうひいうろちね
物也つけあひいるまもろくはあきやうは
一のはをうふ揚はきえる横のたり
あむへし大夫のうひうふりとわうふて
うふへも大夫すわちやうひおを
ますをたのかきわちおすくなわたとひ
たゆふ下をまて作ま上をなわち大夫付へ
趣約つまをうきうひ法役おなは何と上をは
ふわあひすて大夫一人下をなわとも大夫を
とりうふへ是上をのわきなわ仕業をとも
つまと大夫と二人してする仕業ある時大夫
おまて文白をふりあきをうくるたり作まのうく

まわせまーき也

一くゝひろいさきのゝ女敬なとよあゝくと
いきをけくゝす見くゝ所きものせいきみけき
やうゝいゝおもきけうふつきてす

一地謡をくゝひゝ時扇をいさうてよ持うかめ
ますてゝくゝろの柏子をゝけへ柏子るく
ゝけゝときへくゝひ

一うくゝひよ一字けめ二字けめとゝふすい一字
けめて二字のゝるを一字けめとゝふゝ二字
けめて一字の所を二字けめといへ三ゝ
あゝくゝのゝるすよろひゝのうまゝゝ
所よまわうくゝひきだゝ返こきくゝふ也

一文字をくゝとゝふゝるすふうき字二つけくき
ゝ時いまんへのふうき字をくゝひきーさきへ
ちゝくとゝわつけいくゝひかゝーこまを文字
をくゝとゝいへゝ

一あをゝ二つあゝ曲楽こまを二段曲楽とゝふ
なゝき曲楽よあ所ものなゝ子和いゝうき
曲楽い謡ふむゝあゝもむゝをあゝせまーき
だあよあをゝを二ゝさゝめうまをちやうき
ゝーして曲楽は位をさゝこめゝーめはあをゝ
をもゝのゝはあをゝくゝろくあくふこまも
陰陽のこゝろ也越分あけゝ乃位ゝーめ字二ゝ
三ゝかとゝうくとあをは乃字引てあ一坂

かろく地へわたる事是あるひなわあけは
ちとはなれい地まてもたうくなるもの也
きんかきん肝要なわ但もしたうひむさと
ちやくなわるゝゝ又上をみくをさへんへ
上と一大事也あけはあくへい熱別の
位よろむきむさとゝゝるる拍子也
一和方のうゝひやうゝめを何とあく拍子
かゝるいうるくとむよるまいのうちよわ
のはこゝろまて和方うゝひゝは二ゝ三ゝ
みくのもる我ゝとゝくわあまわ下むまく
のするい初心なる拍也
一うゝひをゝ打きゝはゝ所のる強すゝても

若つゝ初ゝすてうちきゝぬ事あわゝ時い
うゝひうへさゝすくゝはきへとわきうふ
ものなわこゝまゝあゝひ也
一うゝひうこゝひんとゝゝろのる人つけんて
すゝへ元はへまんへのわもれるゝ我うゝひ
あ我さぬ拍也強うゝひそこあひるとて氣を
うゝふまきなわ高度けけうとおりひて
ゝきをうゝあむへはけゝ我わをもうへい
はまてあてきるる拍也
一四月朔日おあゝく卯月八日ふとの強賀茂の
ふうゝひむふゝ
一小強のうゝひ拍あゆゝをもうふ宮るのよわ

うゝひ出　松たうきとうふてすーをまく
松るきとゝいたき高やうの時はうゝもねなわ
いつまきのかゝくひも因お
一高曲を出に侍　一調　二機　三新
調子をい機うゆつ也吹曲乃調子を祢とりて
きまあり〳〵まして因をふきていときを因へ
ひきて叔〳〵ゑをおせいこいさき調子乃あう
ゆわおる也調子をうわ成とわてきまあいゝ
して新成いくせいこたさき調子まあふ事
さうあく調子をい機まこめてゝゑをいくを
ゆへま一調子二機三新とはさゝむる也まく
三調子をいきまてゆもちあをい調子まてわ

文字をいゝちひるまてわうつへて文字まも
かゝいゝぬかとの曲をいうかのあわやうを
もつてあひゝふへゝ　毛詩曰
情發　吟新　成　文謂之音
一夫ゝうひるゝひ自我わをゆゝとあわ
を時思ひいゝゝ次才は地ゝわつけうれたを
やゝのす一人ちやく思ひいゝゝる人つを
るゝゝうこすわはこまたをぬ拍なわ
一人付る人も調子れちうひるつねやうう
すゝてたけへ一曲あまてたけぬものなわ
うやゝれる月のおまおかきるあをともすく
いはてつける人いまれまる物横のる物男也

あしく付るゝは変も氣をうしなひさき拍
子をしゆるすあわせまゝ安てもきゝよくき拍也
一曲をおまるゝみ一かまかまわいくゝ所うゝ以
字おまわいまろゝみ大略てはよあるい
ものなわおまわとゝいふるゝ音曲のうちふく
才一のきゝよくき拍なわよゝく不動こゝろ
けてたゝあむへ
一うゝひよ祝云をうわくゝの事乃わちをまる
事呂律二ゝるわおゝる也呂と云いるゝふ
しをいゝるいきけしを也律と云いかあむ
あ入いきとゝふ也まゝ根本をいたへきやう
わくけしとゝく祝云乃あい機を弁よしてきよ

しを拍作考ていゝをあなわ是作ようき云あ也
是ゝい呂乃ゝゝ称也きをいうわてつようきあい
いきをいゝをゝ伐よあゝるへ一こゝ呂乃部
拍あなわ拍い祝云才一なわをうたくの事と
いゝいしをを弁よして機をゆるくもつこゝ
やゝうふよわさこゝろ也きをゆるくもつい
入いきのこゝろ也是律乃伐あいれなるをやう
称也拍いをうたくとあけくを祝よをうきん
しをを機をゝるゆへよ調子けゝるゝ拍をを
とをうたくい機をゆるくもつゆへ一調
子乃めふをゝをとゝ
一謡よ曲節とゝい一乃ゝまわいをゝるゆへゝく

うたひまは足白の替目めもわ能い文字よも
曲舞なも舞をうへうたわ熟名能謡といふ乃
曲舞といふうたをいたおふあわと志るへし
はかりわと云い曲舞ゑ拍子ゑ能を拍也う
うたひ者ゑ能を拍て拍子をい申ようへわ
志うまい曲舞ゑ拍子ゑ能拍ゆへまいと
いふ文字を曲乃うへうさ所能ゑ曲舞と
いへるちてうふわき也風能ゑわいい所ゑ
書部なわ能い春い者別の事めく曲舞い
曲舞乃者ゑまてあまもくうふるいあう
ゑ乃を代舞能やうきて小謡乃ふを
付てうへいるにくゆもろくきこゆる

ゆへゑ者時い能文曲舞乃あわ乃ゑ一のもて
あるひとおきわ是い亡文申樂の能ゑ曲舞を
うたひうふるゑうてこれ曲あまもく
まてあろひ也ちうひけの曲舞乃実初なわ
ち祝乃曲舞かゑまのゑ世を太和うたひと
拍わ乃ふかとゑ曲舞のふ一のこわさきを
やうきうふ地ゑなわゆくとうゑ曲の
見ちかけくちうふ事能志ゑ曲舞乃かわ
あわ能ち面白きるかんうあれい見をひう
事といゑさねゆさわあうゑ比かわめを
しされい理ふへきゑ所を理ふへき事所たく
うゑへさるゑ意ゑうゑもくなわ拍曲舞謡乃

かつりめとゝいふい紫葉拍子を許さうゝふ曲
ふきい文字ない拍子りもつよすわて文字も
白うけわもかろ〳〵又拍子よ引ひゝ海うゝ
よわて面くふまる章あわけきをひとかゝ
きえて面白き風字こを拍子はたもろき
ちやうね也さふよつておかまるところも
一神乃かゝ是よきこゆる也是を曲葉かわの
風ずとすゝゝゝふひとゝい拍子すてかさふ
ともふくゝてあわはまくようゝふゆへよ
文字の章まきを也を程よ遠乃をいさうあゝ
をまてけゝとゝゝ云をうわして一白一曲
よいゝふまて見くよをまてゝろを志きめ

ゝゝふ人もきく人も同じよ一曲のかんて
應と則ゝゝしき感なわ　毛詩曰
正得失動天感鬼神莫近於詩
かくゝとゝるもゝれ感なわ能い恵うんあるゝ
ゆへ月をくゝろをあゝつをゝとゝゝふ男心を
おとろゝをかんも天地うこゝをとゝゝふ敵を
やゝゝふ所を鬼神をうんせゝむるとゝわ
能い海の正風をいあゝをさんるゆへ文字も
白うつりも正也をゝちちよ上をあわきと云い
むゝん也ををゝをゝゝふあやをあをと云る是也
一ゝゝひよ白けきいきけきとゝふる一字拔
いゝそいきよするあわ分けきと云いゝち

きるとき いきを ひとつ ひてうけとひて
いくすぢ白ぢきと云なり
一大ぢわき ちと 糸諸仕ゑ下まて 山伏わきひく
同しく次才乃ぢの上なり
一備わき思ひる上なり同次才乃ぢ下なり
一男をき中まて同次才乃ぢ中まて
一ちて男ちと ちる下ゑく同次才乃ぢ中まて
一ちうり備ちて男非ゑく波りるて上なり
一ものの字けをとく也ちがへゆく歯時のす
一ちんさんぜ五ちんとやい一手きけくけすく
ゑ仕
一ちをぜ戸ゑあん城ちーやうふ拍へ

一ちいかいこちんなわ上まて
一仕ゑぜゑわいうりくくくくるへ服乃
うをまいけうくゑ仕ゑぜうをへ仕ゑぜうをよ
多くゑわをきの乃かうもも多くゑわ多く
一ぜうして中なり
一うへして上なり
一山伏して上なり
一拍狂上なり
一さんいなる拍語
一ちゆいさんの下
一乃いちゆの下
一女のかうわいうまも ちゑやうふ作くく

地氣を上て
音曲氣を上て
儀ゑ下へて
文字こまやうふとひうを
ちか氣を面白く
ちゑへ入て都
おやう二重なり

わるふへ〜但拙僧なすい心もちうふへ
一男乃かゝわ是もうゝくゝくふへしさか
ゝゝなきいあゝく是も拙僧いちうふへ
一ひとめん乃あゝわ才一うかくせるきやうよ
ゝゝるむへ〜
一せうあとのうゝわそいうゝおもひてあすく
あきやうふかゝうる也
一いゝくき拙僧とそいうまもうけくゝうせん
けよゝ拙ゝんとかるへし〜ゝなとも呂なか
とゝうんをすくあくゝうくふせ
一神秘あと佛法ふとはいうゝも真よ球勝ゝ
うゝうる也〜

一けき拙あと人よりさゝまわていうゝへを語る
拙かゝわあわこゝまふとはうゝもよいくゝと
孤ふをかゝこゝろをむひまもちてあいれゝ
わゝふなわゝいなく拙僧も作まや拙ゝとる
ゝあれみをうゝあひふとゝうる拙おゝひの
きやうゝうんい右と同おなわ但仏弟のとゝめ
まゝんゝものあとゝん入て拙よゝうふい各別
なわこゝまゝいうよもあゝゝくと作ゝをかとゝ
ゝさまゝくかるなわゝ拙僧もうゝ是れゝふく
ふけうんゝうなわ
一わゝまゝてゝうゝひゝはけやうゝる世のゝるい
児童乃ゝるいゝと球いうゝおも志とやゝゝ

あ〳〵くしきをさわたふこゝろよとひ
うけんなわ
一上人おとものききよきてあしたのをゝいわき
へのとひうけきいたきへし
一貴人る人へのとひうけんこゝろ者の世間は
さかうのしとくこゝろよ拾へいけきもよせ
拾ふきいさあつへしくこゝろよせんすれ要
なわたゝしみあまわよせきくきは志かう
きものの也志なあひかきんかんようも
一鬼神よものいふすこまいうもよたみあ
けよくくと拾ものろうせんよたゝやうろ
とひあくへ神よは志ゝんよ謡而言葉をかと

志へ一鬼へいさくふいなわ
一菩薩おとけ志てよわさまれ謡うけいろもも
真よこゝろをきまゝてゝふとく謡うくへし
一大内女ゝふおとの志てよわき者の人おい
ゝひのいひうけちうふへしいつまゝ能と
いふそ世間の拾ますおまゝともちのちうひ
ろいねやうよき能ろへ
一家人ゝちけ志なとよものいとするる是まゝ
世上よつまよあるさなうのとゝ志ゝう
き能能ようてあゝいふ別きへ
一まかろ一夢中の人おとんへと業をりいんす
大事一也ふ別に侍あわ

一関守あとのをきいつゝおもふかきぬゝゝゝ我
もちけよくとゝゝふへ
一人おき人ゝまもいつゝもゝかきぬ心をもち
けまくあゝくとゝゝゝふへし
一いつやしき木ゝわすゝやきやまゝゝゝつゝあとの
してゝまき貴僧る僧雲の上人なゝいつゝまも
けたかくむゝひをゝをゝさけてものとふへし
是ゝゝ物なわ
一物狂の仕まゝとひゝけ物ゝゝけゝゝゝせを
してゝゝやゝふゝふへしまゝ四けゝゝゝ
似合ぬ物ゝてゝさやゝまゝゝゝゝいとそむさと
とふゝふゝゝ是ゝ心物也

一夏乃ゝゝひ物右の服れゝまくれまてゝ
ゝひけやゝ乃ん物同お
一曲ゝかまる事ゝ　かまりいゝゝゝゝ
文字かまりいわゝ　ゝ文字かまりとまふをい
一切乃文字い章ゝちゝひゝゝいかまるなわ
ゝなまりとゝいてゝは乃ゝ乃字の章也
てゝは乃字乃章の正いゝひかゝすゝと絮の
ゝひきゝゝわてゝ正ゝちゝゝゝともゝたゝも
ゝけまいゝゝゝゝゝゝゝゝゝわきて
口伝とゝゝしゝゝゝゝゝゝゝゝゝは我
ゝけもゝゝゝゝ乃ゝゝゝ假名の正いちかん
ゝもゝかわゝゝゝれそくゝゝゝゝゝゝふ

とゝの大略まはりの文字のしたなわ越して
濃をいろくさまざまとかすわまるの
文字乃肉をいひてはあひ―きをいまはさとの
文字すて文字へ―ふしい大略まはさまあは
ものなわ

一せきふれ事たゆめのせきふわさろせきふ
ちしふへしきやうきんへのあひしらひ同お
なわ大まいものあきまあひしらひてう
まきいろまもこあやうふてう

一見れ大夫のときいろわもはよゝ拔かんと
いうまふこうろようこうへ

一女の夫の濃ろまもあやうふうふへ

一せこのこうひろまもこひてうふへ

一拍ふひの夫いろわも音曲乃かぬいは
するくくとうふへしうひまようふい
や意よあ―

一、京祇の菩薩あとれ大まいろまも夏乃―ころを
はゝ藤まもちてうふへ―是うこひやうころ
もちれあ―ひ也ろくの結のかんろうなわ
越前のまきまてへうこせ横ぶろもはもろ
う―せ書曲かまし―きすもあく兵をるく
とうふハ―わさ結ふ氏ふるくたも―ろうせ
こふひうけうへいしてみきすく拔あさへき
やうなくこいろまもわきのこうひ結たきい

あ〜き才一なわさうくくとかろく謡うけん
るゝ約要也大夫とてきとのうくひきいふち
きゝまと約よわうまてきこゆる才一の
上まのわき也いたりうんようなわ
一一字志わわ二字志わといふ事あわ一字
志わわい二字目を志ふはを一字志わとて
くふふ〜の中也二字志ふまとゝい二字謡て
三字目をくふを二字志ふまとゝて才一わ
きゝ〜なわ
一三字さうわ三字あうわ三いひきとゝもうふ
をゝふゝ〜のるゝよてん三字あうわとゝい
三いたくひてうわあくふ城ゝなわ新ゝいわ

くてうゝひふくうゝてうわ才一きくゝよくき
拍也先大きはきゝふる也三字さうわとゝい
さくふゝ〜のこいあゝへてさけうるを三字
さくふとゝ也こまおきまきゝふゝ〜なわ
三いゝ引とゝいひくゝゝを三いなゝひうる城
三たひきとゝなわうゝひねくゝふき
ゝいさう也しときゝきゝふゝ〜也いりまも
似うる事のおゝふそきゝても同名ゝて
中よくうれうへうゝひきゝゆくゝて雛の
拍もゝとなわんゝいくいうけへ
一うゝひゝとゝめくのまゝはの事ゝよそわそうる
ようくまやうんと謡る也

一度ゑうこひつゝあきはのうこひやうのる
うこひすゑる変大略乃ところうこひとゑる
りうくる也

一図書乃つけあひのる視云乃いけすく付へし
きんか裏傷迹懐すとのいつゝまもよくと
つけへしとりもけくときのとゑあと付へし
かんちん也ゆもあきをうけくけけ
へ備殿見うこ乃けきあひいつゝもけすく
こやうふ付へしいつゝもれくけけ
あひ乃いもちうんすなわ
一女房花源氏供養ふとい見きうこひをきく
ちうんちやくいくとるあわ心時乃うこひ損

わこやうてこうろへてうこひ坂さきへとひ
方へ徳うけへこゝきあこひなわうやうけ
事ゝ当是へもわこうるへしこれたくひ乃ふ
れか

一音曲をうふうんとおもつゝまんへをいるも
するとうこひちきよ書曲をうふへ
熟こひ乃ふかゝしきるをうこひろへ
書曲乃威光ゑきもの也めつゝくきこくを
うこうんとおもつゝまんへをろくまうふ
事ふらひ也

以上うこひの格意八十五ケ条心巻こ
あゝ以那大形是より奥ふあきる

ゑ百貫文あさうゝ百揚銭ゝゝゝ
一揚をわきかゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝりのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人あまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ